

しろぎつね あお いつ ちようろう き
白狐の蒼と五つの長老の樹





しろぎつね あお いつ ちやうろう き
白狐の蒼と五つの長老の樹

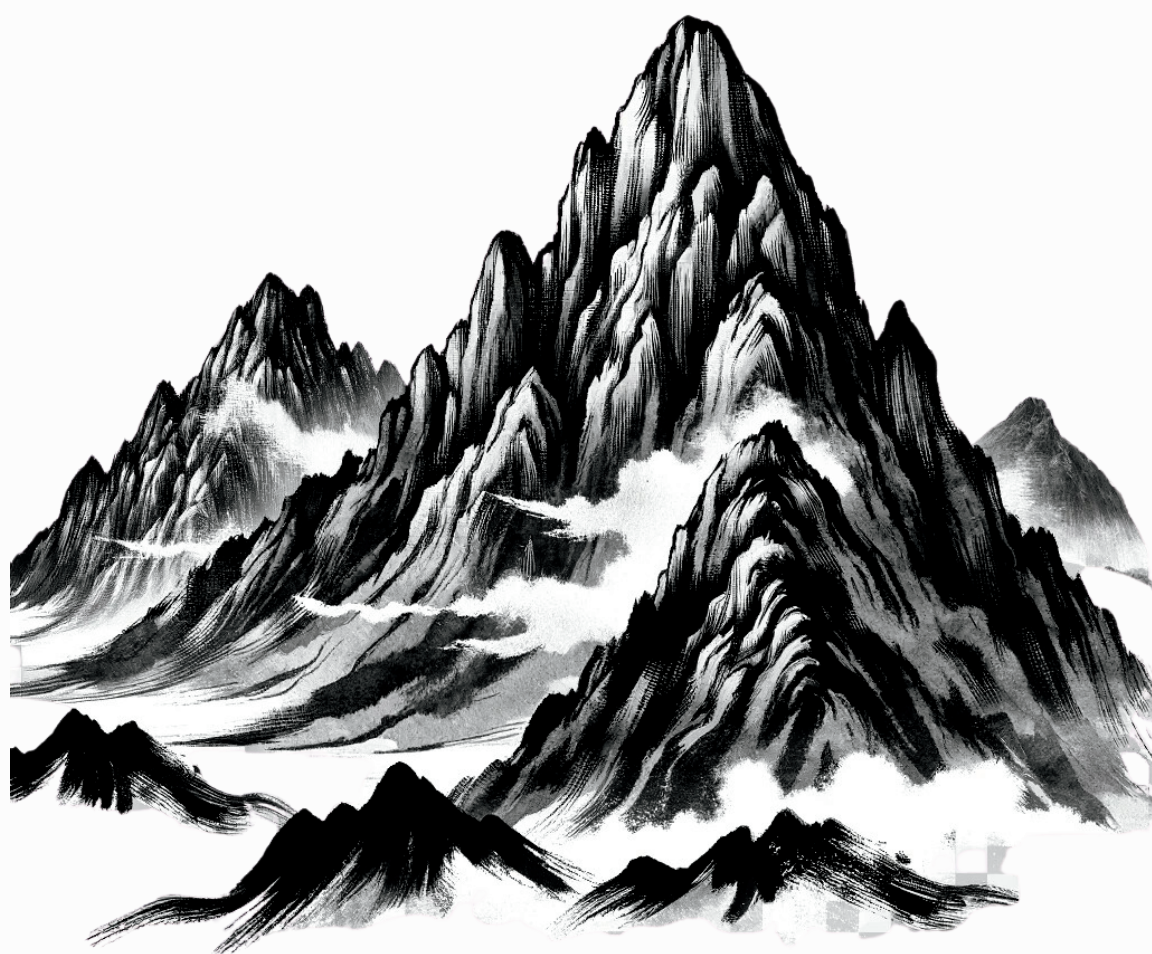
作：樋尾 重樹

The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions. It emphasizes that proper record-keeping is essential for ensuring the integrity of the financial system and for providing a clear audit trail. The document also highlights the need for transparency and accountability in all financial dealings.

In the second part, the document outlines the various methods used to collect and analyze data. It describes the process of gathering information from different sources and how this data is then used to identify trends and patterns. The document also discusses the importance of using reliable and valid data sources to ensure the accuracy of the findings.

The third part of the document focuses on the results of the study. It presents the findings of the research and discusses their implications for the field. The document also includes a discussion of the limitations of the study and suggestions for future research.

Finally, the document concludes with a summary of the key points and a statement of the author's conclusions. It reiterates the importance of maintaining accurate records and the need for transparency and accountability in financial dealings.



むかし
昔、むかし、

まだ動植物が「人」よりも大きく「人」の言葉を話せた時代。



かみさま す てんかい いちばん ちか やまやま いなり まつ
神様が住む天界から一番近い山々にお稲荷さんを祀った

ふる やしろ かこ じゅれい すうひゃくねん
古いお社と、そのまわりを囲むように樹齢数百年の

ごほん たいぼく せいいい やど やまやま へいわ まも
五本の大木が精霊を宿し、山々の平和を守っていました。



ある時、^{とき}長^{ちやうじゆ}寿である長^{ちやうろう}老たちも^{けいけん}経験をしたことのない

^{はげ}激しい嵐に^{あらし}山々は^{やま}襲^{おそ}われました。

^{あらあら}荒々しく^{かみなり}雷が^な鳴^{ひび}り響^{きざ}き、^{しよくぶつ}木々や^{とつふう}植物が^{なぎ}突風で^{たお}薙^{たお}ぎ倒され、

^{ぞうすい}増水した^{かわ}川には^{どうしよくぶつ}たくさんの^の動植物が^の飲みこまれていくような

^{すき}凄まじい嵐が^{あらし}一週^{いっしゅうかん}間も^{つづ}続きました。



「バリバリバリ！ ガシャァ〜ン！」



くろ くも あいだ たいよう ひかり さ こ
黒い雲の間から太陽の光が差し込み、

やしろ まえ かみなり お
お社の前に雷が落ちました。

ちやうろう かみなり お のぞ こ
長老たちが雷の落ちたところを覗き込んでみると、

けむり なか きぬ なめしろいろ け
煙の中から絹のように滑らかな白色の毛に、

ひとみ うみ あお きつね こ うぶごえ
瞳が海のように蒼い狐の子どもが産声をあげていました。

さいちやうろう こぎつね も あ い
最長老がその子狐を持ち上げて言います。

かみさま おく もの みな たいせつ そだ
「神様からの贈り物じゃ。皆で大切に育てよう！」

こぎつね ひとみ あお
子狐は、瞳が蒼かったことから

なまえ な づ
名前を「蒼」（あお）と名付けられました。

あお ちやうろう はし かた い ため
蒼は長老たちから、走り方や生きていく為に

ひつよう こと まな せいちやう
必要な事を学び、スクスクと成長していきます。

そんな蒼^{あお}には毎日^{まいにち}楽しみ^{たの}にしていることがありました。

それは山^{やま}の頂上^{ちようじよう}から下界^{げかい}にいる、いろんな動植物^{どうしよくぶつ}を

眺^{なが}める事^{こと}です。今日^{きょう}も、知らない動植物^{どうしよくぶつ}が見^みえます。

「あの2本足^{にほんあし}で歩^{ある}いている、「人^{ひと}」と言う動物^{どうぶつ}に会^あってみたいな」

そのうちに蒼^{あお}は山^{やま}を下^おりて、旅^{たび}に出^でたいという

好奇^{こうきしん}心が芽^め生^ばえていきました。



その日の夜、長老たちに言います。

「山頂から下界を眺めていると、

僕には知らない事が沢山あるんだよ！ 旅に出てもいいかな？」

そうすると最長老が言いました。

「蒼！生きていく為に必要なことは全て教えたのじゃが、

まだ『心構え』を教えとらん。

『心構え』を教えるから、それから旅に出なさい」

しかし、蒼は下界へ行くことへの好奇心が抑えきれず、

体力に自信もあった為、決意は変わりません。

翌朝、旅立ちの準備をしていた時に長老がやってきます。

「この先、辛い事もたくさんあると思うが、

ちゃんと帰ってくるんじゃよ。

お前の家はここなんじゃから」と言い、頭を撫でてくれました。

あお いきようようたびだ
蒼は、意気揚々と旅立ちます。



もり なか はし
森の中を走っていると、お母さん狐と子狐に出逢いました。

あお た ど
蒼は立ち止まり、その狐たちから少し離れた場所で見えていました。

そうすると、

「ねえお母さん、あの白くて大きな動物も同じ狐さん？」

「あれは狐に似ているけれど

わたし なかま
私たちの仲間ではないわね。

あぶ はや はな い
危ないから早く離れましょう！」と言い、

あお にら め
蒼を睨みつけるような眼をして、

その場を立ち去っていきました。



あお おな きつね なかま い
蒼は同じ狐なのに「仲間」ではないと言われ、

はじ さび かん
初めて寂しいと感じました。

とぼとぼ^{ある}歩いていると、次は猿^{つぎ}の集^{さる}団^{しゅうだん}に出^{であ}逢いました。

猿^{さる}たちは蒼^{あお}を見^みるなりコソコソと話^{はなし}をします。

威^い勢^{せい}の良^いい子^こ猿^{さる}が、「おーい、そこのデカ^{でか}いやツ！

お前^{まえ}が^がいると気^き持^もち悪^{わる}いから早^{はや}くあ^あち^ちに行^いけよ！」

と言^いい、木^きの上^うから石^{いし}や木^きの実^みを投^なげつ^つけてき^きました。



「ああ。また仲^{なか}間^ま外^{はず}れかあ。

本^{ほん}当^{とう}の仲^{なか}間^まや友^{とも}達^{だち}が欲^ほしいな」と寂^{さび}しくなります。

あお みず の ため いけ た よ
蒼は水を飲む為に池に立ち寄りました。

みず の かつば いけ なか かお だ い
水を飲んでいると、河童が池の中から顔を出して言います。

「お前^{まえ}は何^{なん}という動物^{どうぶつ}だ？動物^{どうぶつ}なら泳^{およ}げると思^{おも}うから、

お前^{まえ}も泳^{およ}いでみろよ！」

あお やまそだ およ かた し
蒼は山育ちなので泳ぎ方を知りません。

すると、

「泳^{およ}ぎ方も知^{かた}らない動物^{し どうぶつ}は俺^{おれ}たちの仲間^{なかま}じゃねーな」と言^いわれたので、

あお ゆうき だ いけ あし ふ い
蒼は勇気を出して池に足を踏み入れています。

でも、どのように泳^{およ}げばよいのかわからず、

けっきょく おぼ
結局、溺れてしまいました。

かつば すがた み わら
河童はその姿を見て、ワハハと笑いながら

いけ なか およ き い
池の中を泳いで去って行きました。

あお てあし
蒼は手足をバタバタさせ、

なんとか岸^{きしべ}辺^{たど}に辿^つり着くことができましたが

だれ たす
誰も助けてくれないことに、

また寂^{さび}しさを感^{かん}じました。



しかし「人」という動物がいる人里まで

行きたい気持ちをおもいだし、蒼は旅を続けます。



もりなかぬ
森の中を抜け、

ひとざとつうやまみろて
人里に通ずる山道に出ました。

ゆっくりくだ
ゆっくり下っていくと

しかいのししけがわまとおお
鹿や猪の毛皮を纏った大きな

ひとて
「人」と出くわしました。

むねたかなちかよ
胸が高鳴り近寄ると...「わあ、化け物！こっちへ来るな！」

あおおさけどうじじゅうせいなひび
と、蒼に向かって叫び同時に銃声が鳴り響きます。

じゅうだんあおほほろしたた
その銃弾は蒼の頬をかすめ血が滴ります。

あおこわもりなか
蒼は怖くなり、森の中へ逃げますが、

きどうてんなにお
気が動転し、何が起こったのかわかりませんでした。

あこがひとどうぶつ
ただ、憧れていた「人」という動物は、

あおそうぞうまったちが
蒼の想像とは全く違っていました。



あお どうじば む
蒼は湯治場へ向かいます。

どうしよくぶつ けが びょうき とき おとず ところ
動植物が怪我や病気をした時に訪れる所です。

は やくそう きず ぬ
そこに生えている薬草を傷に塗り、

おんせん つ けが びょうき なお い
温泉に浸かると怪我や病気が治ると言われているのです。

きょう どうぶつ ちりょう
今日もたくさんの動物たちが治療をしていました。

あお み こわ にげ どうぶつ
やはり蒼のことは見ると怖くて逃げてしまう動物たちもいました。

い なかま はず
「どこに行ってもぼくは仲間外れなんだな」と

おも やくそう ほほ きず ぬ おんせん つ
思いながら、薬草を頬の傷に塗り温泉に浸かると、

はじ
ウトウトし始めました。

め まえ あお おお
すると、目の前に蒼よりも大きく、

くろぐろ つや けなみ ち あか ひどみ
黒々と艶やかな毛並をし、血のように赤い瞳をした

どうぶつ あお み お
動物が蒼のことは見下ろしてしていました。

あお ほんのうてき りんせんたいせい はい
蒼はハッとして本能的に臨戦態勢に入りましたが

み どうぶつ みぎめ けが
よく見ると、この動物の右目は怪我をしていて、

み くろ おお どうぶつ い
見えていないようでした。その黒い大きな動物は言います。

「お前は狼か？ここに何をしに来たんだ？」

「僕は狐。「人」に興味があって天界に一番近い山から

ここまでやって来たんだけど「人」に近づいたら、
急に何か飛び出てきて、怪我しちゃったんだ」

「俺は狼のクロだ！種族は違うけど俺とお前は
似た者同士だな。俺のこの目も「人」が撃った鉄砲

という道具でやられた。だから俺は「人」が嫌いだ」

それから蒼とクロは温泉に浸かったり、

木の下で寝転んだりしながら語り合いました。

クロは「お前は今日から俺の仲間だ。

これからは俺についてこい！」と言います。

生まれて初めて出来た「仲間」に、

蒼は嬉しくなりました。



あお やま せいかつ はじ
蒼とクロの山の生活が始まります。

い ため ろえ おし
クロは生きる為の知恵を教えてくださいました。

ひと しか わな みわ かた かるく おそ かた
「人」が仕掛けた罠の見分け方や家畜の襲い方

ひと つく のうさくぶつ ぬす かた
「人」が作った農作物の盗み方まで。

あお あいぼう よ
クロは蒼のことを「相棒」と呼んでくれるので、

あお うれ す
蒼は嬉しく、クロのことが好きになっていきます。

あお ひと きょうふ
しかし蒼は「人」への恐怖はあるものの、

いま ひと
今でも「人」への

こうきしん き
好奇心は消えませんでした。

ひと み
「人」から見れば

あお てんてき
蒼とクロは天敵です。



きょう ひとざと あお はな あ
今日も人里では蒼とクロについての話し合いをしています。

くろいろ しろいろ おおかみ て お
「あの黒色と白色の狼は手に負えない」

ところ か とり ぜんぶ
「わしの所では飼っていた鶏を全部やられた」

おれ ところ のうさくぶつ く あ う もの
「俺の所は農作物を喰い荒らされて、売り物にもならねえ」

そん^{そん}みん^{みん} あお^{あお} 村^村民^民は 蒼^蒼と クロ^{クロ}を 追^おい 出^だそう と 計^{けい}画^{かく}し ます。

「人^{ひと}」は 松^{たい}明^{まつ}を 持^もっ て 蒼^{あお}と クロ^{クロ}の 埒^{ねぐら}の 周^{まわ}りを 囲^{かこ}み
火^いを 放^{はな}ら ました。

み^いる み^みる う^うち に 火^ほの 渦^{うず}で 囲^{かこ}ま れ、 炎^{ほのお}と 煙^{けむり}が 襲^{おそ}っ て き ます。



「憎^{にく}き「人^{ひと}」ど も。

俺^{おれ}の 右^{みぎめ}目^めだ け で は 足^たら ん と 言^いう わ け か。 ガ^ガル^ルル^ル〜」

ク^クロ^ロは 牙^{きば}を お^おき 出^だし、

瞳^{ひとみ}の 色^{いろ}が 一^{いち}段^{だん}と 赤^{あか}く 染^そま っ て い き ま し た。

クロは蒼^{あお}に言^いいます。

「人^{ひと}はずる賢^{かしこ}い動物^{どうぶつ}だ。

炎^{ほのお}と煙^{けむり}に巻^まかれ苦^{くる}しくな^{とき}った時^{そと}に外^とに飛^だび出^{てっぼう}すと鉄砲^{てつぱう}で

狙^{ねら}ってくるはずだから、今^{いま}は我^{がまん}慢^{まん}しろよ！」

蒼^{あお}は埒^{ねぐら}の近^{ちか}くにある水溜^{みずた}まりを思^{おも}い出^だし、

水汲^{みずく}みを口^{くち}に咥^{くわ}え、炎^{ほのお}の元^{もと}まで行^いき、水^{みず}を何^{なんど}度も掛^かけます。

すると一^{いっぽん}本の逃^にげ道^{みち}が出来^{でき}ました。


その瞬^{しゆんかん}間^{かん}、クロは走^{はし}って「人^{ひと}」に襲^{おそ}い掛^かかります。

慌^{あわ}てて蒼^{あお}も走^{はし}り、クロと「人^{ひと}」の間^{あいだ}に割^わって入^{はい}ります。

クロは臨^{りんせんたいせい}戦^{せん}態^{たい}勢^{せい}であ^{ため}った為^{あお}、蒼^{あお}の喉^{のど}元^{もと}を噛^かんでしま^かいます。

同^{どうじ}時に「パァーン」と銃^{じゅうせい}声^{せい}が鳴^なり響^{ひび}き

蒼^{あお}のお腹^{なか}に当^あたりました。



絹のように滑らかで真っ白な毛は赤色に染まり、

血がドクドクと吹き出していくので、

「人」は怖気づき立ち去っていきます。

クロは蒼を見下ろしながら言いました。

「お前は「人」の味方をしたな。

もともと俺はお前のことを仲間だとは思っていない。

利用できると思ったから一緒にいただけだ。この役立たず！」

クロは蒼を置いてその場から立ち去ってしまいました。



あお　　こころ　　ふか　　きず　　でき
蒼は、心にも深い傷が出来てしまいました。

ち　　たいりょう　　なが　　いしき　　もうろう　　なか
血も大量に流れ意識が朦朧とする中、

あお　　おお　　しろぎつね　　にいき　　あらわ
蒼よりも大きな白狐二匹が現れます。



おお　　しろぎつね　　あお　　せなか　　の　　はし　　だ
その大きな白狐は蒼を背中に乗せて、走り出しました。

せなか　　つた　　い　　やさ　　あたた
背中から伝わるなんとも言えない優しさと温かさ。

とう　　かあ　　かん
「お父さんやお母さんがいたらこんな感じなのかな」

め あ 開けると、^{かみさま}神様が^す住む^{てんかい}天界から^{いらばん}一番^{ちか}近い

^{いなり}お稲荷さんを^{まつ}祀った^{ふる}古い^{やしろ}お社の^{まえ}前にいました。

^{ちやうろう}長老たちが^{かんびやう}つきっきりで看病をしてくれたおかげで

^{あお}蒼は^{じよじよ}徐々に^{たいりよく}体力を^{かいふく}回復し、^{からだ}身体の^{きず}傷も^い癒えていきます。

しかし、^{きず}傷ついた^{こころ}心はなかなか^{もと}元^{もと}に戻らず、

^{げんき}元気の^{あお}ない^{ちやうろう}蒼を長老たちは^{しんぱい}心配します。



ある日、蒼は旅に出てからの話を初めて長老たちをしました。

親狐と子狐の話、サルと出逢った話、

河童と遭遇した話、「人」に鉄砲で撃たれた話、

クロという狼と共に生活した話、大きな白狐が

助けてくれた話。そして、長老たちの忠告を

聞かずに旅に出たことを詫言いました。

長老たちが言いました。

「本当に辛い思いをしたの。大きな白狐はきっと

神様の使いか、蒼の父さん、母さんじゃろな」

「蒼や、わしらは家族じゃ。

お前がいない間は皆、心配しておった。

酷い怪我をして戻ってきた時には肝を冷やしたわい。

わしらの命で良かったら蒼を助ける為に

使ってほしいと祠の神様に何度もお願いしたんじゃぞお！」

蒼は初めて家族という存在の意味と大切さを知りました。

血が繋がっていなくても、絆が一番大切であることを

深く理解し、自覚した瞬間、心が軽くなるのを感じました。

蒼は長老たちに言います。

「僕、長老たちの為になにかしたい」

最長老が笑いながら言いました。

「さっきも言ったじゃろ。家族なんだから楽しく

過ごせればええのじゃ。でも旅に出る前に話した

『心構え』の事を憶えておるか？我々長老の樹には

名前があつてのお、それぞれ意味があるのじゃ。

この『五つの氣』をお前に授けることにする」



「わしの^{ほんとう}本当の名は、^{きくば}気配り^{ちやうろう}長老じゃ。

^{やまやま}山々に^す住む^{どうしよくぶつ}動植物が^{あんしん}安心・^{あんぜん}安全に^す過ごせるよう、

^き気を^{めぐ}巡らせ^{こうどう}行動することが^{しめい}使命じゃ」

「^{わたし}私の^{ほんとう}本当の名は、^{きづか}気遣いばあちゃんなのよ。

^{さいちやうろう}最長老の^{きくば}気配りは^{やまぜんたい}山全体の^{どうしよくぶつ}動植物。

^{わたし}私は^{やまやま}山々に^す住む^{どうしよくぶつ}動植物^{ひとり}一人

ひとりが^{へいわ}平和に^す過ごせるよう^き気を^{つか}遣うことなの」

「俺の本当の名は、氣働き長老と言うんじゃ。

相手が思う事を予測して先に行動すること。

つまり痒いところにも手が届く、そんな行動じゃな」

「私の本当の名前は、一団和氣の長老と言うんじゃよ。

朗らかな雰囲気で団結、協力し合えるようにすることが

使命じゃ。但し仲良くするだけではダメじゃ。

時には相手のことを思って真剣に叱ることができる

団結というところが肝なのじゃよ」

「私の名前は意氣長老じゃ。簡単に言うとやる気じゃな。

何でも前向きな気持ちで日々努力を重ねる。

そして、使命感と覚悟を持って山々の動植物を守ることが

肝心なのじゃ」

まず蒼^{あお}は山々^{やまやま}を駆け巡^かり動植物^{めぐ どうしよくぶつ}たちに笑顔^{えがお}で挨拶^{あいさつ}をし、

なに^{なに}か変^かわった様子^{ようす}がないか、

困^{こま}りごとがないかを聴^きき回^{まわ}りました。

すると山々^{やまやま}に住^すむ動植物^{どうしよくぶつ}は、

声^{こえ}をかけてくれる蒼^{あお}を怖^{こわ}がることがなくなり、

逆^{ぎやく}に蒼^{あお}を頼^{たよ}りにお社^{やしろ}まで訪^{おとず}れる動植物^{どうしよくぶつ}が増^ふえていったのです。

ある日、旅路で出逢った親子狐に遭遇しました。

子狐は出逢った時よりも

ふた回りほど大きく成長していました。

すると母狐が蒼に寄ってきて、

少し言い辛そうに

「あの時は酷いことを言ってごめんなさい。

あなたの身体が凄く大きかったから、

子供に何かあってはいけないと思ってしまっ」と

頭を下げる母狐に蒼は言います。

「当然のことだと思えます。

ですから、頭を上げてください」



こんど こぎつね い
今度は子狐が言います。

「ねえねえ、蒼はこの山に住む動植物が

あんぜん あんしん く
安全で安心して暮らせるよう、

パトロールをしてくれているんだよね！

ぼく おとな にい
僕も大人になったら、お兄ちゃんみたいになりたいな」



あお てれ こた
蒼は照れながら答えます。

「何だか恥ずかしいけど、とても嬉しいよ。

きみ ぼく すば でき
きっと君なら僕よりも素晴らしいパトロールが出来るよ！」

きょう ほらあな ねぐら おおかみ ところ む
今日はいつも洞穴を埒にしている狼の所へ向かいます。

おおかみ ひと
狼はいつも独りぼっちで

やまやま どうしょくぶつ い きら
山々の動植物からも忌み嫌われていました。

あお おおかみ い
蒼がこの狼のところに行くようになった

りゆう むかし じぶん に
理由は、昔の自分と似ているから。

さいしょ
最初は「うるさい！ あっち行け！」と、

い なんかい かよ
言われていましたが、何回も通ううちに

すこ かいわ
少しずつ会話するようになり

なかよ
仲良くなっていきました。

おおかみ ところ つ
狼の所へ着くと、

おおかみ ほらあな なか くる うずくま
狼は洞穴の中で苦しそうに蹲っていました。

あお こえ か
蒼が「どうしたんだい？」と声を掛けると

うめ こえ
呻くような声で

ひとごと もの た なか しろ かた
「人里にあった物を食べたら、その中に白い硬いものが

はい い とたん き うしな
入っていて」と言った途端、気を失ってしまいました。

あお ぜんそくりよく ちやうろう ところ もど
蒼は全速力で長老たちの所へ戻ります。



ちょうろう　ところ　つ　おおかみ　じょうたい　つた
長老たちの所へ着き、狼の状態を伝えます。

ちょうろう　どく　ひとざと　からく　はたけ
長老が「それはたぶん毒じゃな。人里の家畜や畑を
あ　わ　やす　た　もの　お
荒らされないように分かり易いところに食べ物を置き、
なか　どく　し　こ
その中に毒を仕込むんじゃよ」

あお　い
蒼は言います。

「どうしたら治るのか、教えてほしい！」

ちょうろう
すると長老は

むかし　まえ　い　やま　ちょうじょう　よこ　がけ
「昔お前がよく行っていた山の頂上の横に崖があるじゃろ。

がけ　むらさきいろ　はな　さ　しょくぶつ
その崖に紫色の花が咲いている植物があるんじやが、

せん　いっしゅうかん　の　なお　おも
それを煎じて一週間飲ませると治ると思うが、

がけ　きゅうしゃめん　あぶ
あの崖は急斜面で危ないんじや」

おし
と教えてくれます。

あお いそ やま ちようじょう のぼ
蒼は急いで山の頂上へ登ります。

やま ちようじょう つ よこ がけ のぞ がけ ちゆうふく
山の頂上に着き、横にある崖を覗くと崖の中腹あたりに

むらさきいろ はな しょくぶつ かす み
紫色の花をした植物が微かに見えました。

がけ そうぞう きゆうこうばい
崖は想像よりも急勾配でしたが、

ゆうき ふ しぼ がけ お
勇気を振り絞りゆっくりと崖を降りていきます。

おも がけ ちゆうふく つ
やっこの思いで崖の中腹に着くと、

あた いろめん むらさきいろ はな き
辺り一面に紫色の花が咲いていました。



あお はな くろ くわ がけ のぼ はじ
蒼は花を口に咥えて崖を登り始めます。

す ちようじよう
もう直ぐ頂上というところで

あし ば いし くず あお からだ じめん
足場の石が崩れ、蒼の身体も地面に

ま さか お
真っ逆さまに落ちていきます。

あお なん がけ は き えだ いし
蒼も何とか崖に生えている木の枝や石に

て か とど
手を掛けようとしませんが、届きません。

ぜったいぜつめい
絶対絶滅のピンチです。

ふしぎ こと ちようじよう き つた
すると不思議な事に、頂上から樹の蔦が

がけ あお からだ ま つ
崖をつたい蒼の身体に巻き付きます。

あお つた のぼ さんちよう つ
そうして蒼はその蔦で登り山頂に着くと、

はな ばしょ おし ちようろう
花がある場所を教えてくれた長老がいました。

ちようろう あお あぶ しんばい き
長老は「蒼、危なかったなあ。心配で来てみたら、

あん じよう き よ
案の定これじゃ。わしも来て良かったわい」

あお うれ こわ かさ ちようろう と
蒼は、嬉しさと怖さが重なり長老に飛びつきました。



ちようろう まえ だいじ かぞく い
長老は「お前は大事な家族だからな！」と言

だ
抱きしめてくれました。

はや おおかみ い せん の
「早く狼のところに言って煎じて飲ませてあげなさい！」と

ちようろう い おおかみ す ほらあな む
長老に言われ、狼の住む洞穴に向かいました。

す むらさきいろ はな せん の
直ぐに紫色の花を煎じ、ゆっくりと飲ませます。

そうすると おおかみ すこ らく ねいき はじ
そうすると狼も少し楽になったようで寝息をたて始めました。

それから いっしゅうかん おおかみ す ほらあな かよ むらさきいろ はな せん の
それから一週間、狼が住む洞穴へ通い紫色の花を煎じ飲ませます。

はな な どくけ そう い
この花の名は「毒消し草」と言うようです。

すると おおかみ たいちよう よ
すると狼の体調も良くなり、

おおかみ きら もの おれ よ
狼は「嫌われ者の俺に良くしてくれてありがとう。

まえ おれ いのち おんじん
お前は俺の命の恩人だ。

あお こま としかなら おれ たす
蒼が困った時は必ず俺が助けるからな」

あお おおかみ
蒼は狼に

ともだち げんき
「友達でしょ！ 元氣になってよかった」

つた
と伝えました。



とても^{あつ}暑い^い日、蒼^{あお}は今日^{きょう}もパトロールをします。

すると水^{みづ}辺^べから離^{はな}れた道^{みち}端^{はた}に高^{こう}齢^{れい}の河^か童^{どう}が倒^{たお}れていました。

昔^{むかし}、長^{ちやう}老^{ろう}が「河^か童^{どう}は頭^{あたま}の上^{うへ}のお皿^{さら}が干^ひからびると

死^しんでしま^しうんだよ」と教^{おし}えてもら^{もら}ったこと^{こと}を思^{おも}い出^だし、

蒼^{あお}は走^{はし}って山^{やま}から湧^わき出^でる石^い清^{わしみず}水^{くろ}を口^{ふく}に含^くみ

河^か童^{どう}の頭^{あたま}の皿^{さら}に掛^かけてみ^みました。

何^{なん}度^ども何^{なん}度^ども水^{みづ}を掛^かけます。

そうす^{そう}ると高^{こう}齢^{れい}の河^か童^{どう}は意^い識^しを取^とり戻^{もど}しました。

その河^か童^{どう}は無^む言^{ごん}で頭^{あたま}を下^さげていて、

その様^{よう}子^すで目^めも見^みえなく、

喋^{しゃべ}れないのが分^わかりました。

ただ耳^{みみ}は聴^きこえているようでした。



あお たびじ とろゆう かつば あ いけ おも だ
蒼は旅路の途中で河童に逢った池のことを思い出しました。

い なに わ おも
そこに行けば何か分かるのではと思い、

こうれい かつば せなか いけ お
高齢の河童を背中にのせ、池へと向かいます。

いけ つ かつば はっけん
池に着くと河童を発見しました。

いぜん てあ かつば
以前に出逢ったあの河童です。

かつば あわ こえ い
河童は慌てた声で言います。

とう
「父ちゃん？」

い もの の だいじょうぶ
そのでかい生き物に乗っていて大丈夫なのか？」

きみ とう
「君のお父さんなの？」

いけ はな ばしよ たお
この池からだいぶ離れた場所で倒れていたんだよ。

さら しめ げんき
お血を湿らせたら元気になったよ」



河童^{かつば}は池^{いけ}から上^あがって来^きて

「俺^{おれ}の父^{とう}ちゃんだよ。父^{とう}ちゃんは、生^うまれつき目^めが見^みえないし、

言葉^{ことば}も喋^{しゃべ}れない。なの^なにこ^こが住^すみ処^かってよく分^わかったな」

「今^{いま}まで河童^{かつば}さん^あと逢^あったこと^{こと}がある^あのはこ^こだけだ^{だけ}ったから」

そう^{そう}する^{する}と河童^{かつば}は

「ねえ、ち^ちよ^よとそ^まこ^こで待^まっててくれ^{くれ}んかあ〜」

と^い言^いい姿^{すがた}を消^けします。

しばらくして、

たくさん さかな かか かつば すがた あらわ
沢山の魚を抱えた河童が姿を現します。

「これ！ 持^もってって。

あん時^{とき}はちよっとからかい過^すぎた。

ごめんなさい。それから、ありがとう」

かつば ささ きよう さかな おす
河童は笹で器用に魚を結び

あお せなか ささ さかな か
蒼の背中に笹と魚を掛けてくれます。

「これからは友達^{ともだち}でいような！」と言って見送^{みおく}ってくれました。

「友達^{ともだち}」と言われた事が嬉しい蒼^{あお}は笑顔で手^てを振^ふります。



やまやま
山々をパトロールしていると、

こんど ろい こ な ごえ き
今度は小さい子どもの泣き声が聞こえてきました。

あお みみ す ばしよ さぐ はし だ
蒼は耳を澄ませ場所を探りながら走り出します。

たいほく たお はさ こざる み
すると大木が倒れ、挟まれている子猿が見えました。

あお こざる たす ろかよ さる しゅうだん
蒼は子猿を助けようと近寄ると猿の集団がいました。

あお きづ ざる い
蒼に気付いたボス猿が言います。

「おい、そこのデカいやつ！ あっちに行け！」

この言い方…



たび どうちゆう いし き み なげ
旅の道中に、石や木の實を投げつけてきた

いせい こざる
威勢のよい子猿だったのです。

こざる む も さる
その子猿は群れを持つボス猿になっているようでした。

あお たいぼく したじ こざる か
蒼は大木の下敷きになっている子猿のもとへ駆けつけます。

さる と かま
ボス猿に止められても構わず、

たいぼく たいあ
その大木に体当たりします。

ろから いっぱい からだ たいぼく うご
力一杯、身体をぶつけても大木はビクとも動きません。

さる たいぼく ひ ば おし
猿たちも大木を引っ張ったり、押したりしますが、

うご
やはりビクとも動きません。

ぼく むり
「僕だけでは無理だ。

ぜんいん きょうりよく うご あお おも
全員で協力しないと動かせない」と蒼は思いました。

そして、ボス猿の所へ行き、子猿を救うための方法を

提案しました。猿たちに蔓を集めてもらい、

たいぼく あお からだ つた ま つ みな ひ ば
大木と蒼の身体に蔓を巻き付け、皆で引っ張る

という共同作戦でした。

ボス猿も「子猿の命にはかえられない！

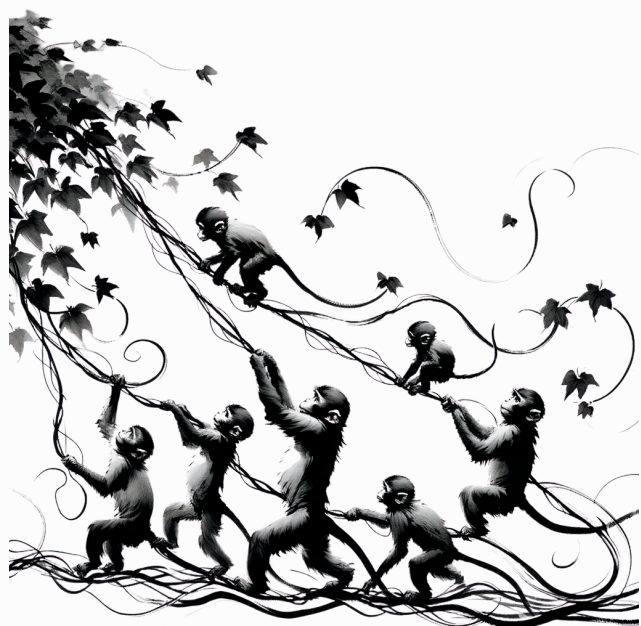
みな い とお
皆、コイツの言う通りにやってみよう。

なが つた いそ さが たの
長めの蔓を急いで採ってきてくれ。頼むぞ！」と

む ぜんたい こえ か
群れ全体に声を掛けました。

たいぼく あお からだ つた ま つ
大木と蒼の身体に蔓を巻き付け、

さる む たいぼく ひ ば じゅんび
猿の群れたちも大木を引っ張る準備ができました。



「ソーレ、ソーレ」

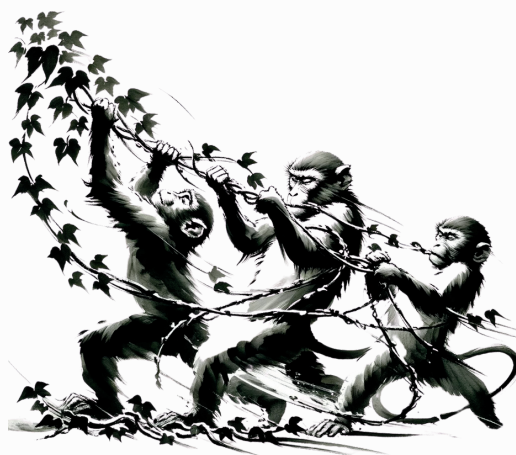
「ソーレ、ソーレ」

たいほく すこ うご かんしょく みな つた
大木が少し動いた感触が皆に伝わります。

いっかい ひ ば
もう一回引っ張ります。

「ソーレ、ソーレ」

「ソーレ、ソーレ」



なんじゅうかい おこな き うご む さる
何十回も行いましたが、木は動かず、群れの猿たち、

あお つか は
蒼も疲れ果てていきました。

きょうりよく ひつよう
もっとたくさんの協力が必要だ。

とお すご いきお はし どうぶつ
そこへ遠くから凄い勢いで走ってくる動物がいました。

ほらあな す おおかみ
洞穴に住む狼です。

おおかみ あお まえ はげ あせ にお いきざ
狼は蒼に「お前の激しく汗をかく匂いと息切れしている

おと き いそ か つ
音が聴こえてきたから急いで駆け付けたぞ！」

さる む とお かく
すると猿の群れは遠くに隠れ、

さる とお い
ボス猿が遠くから言います。

おおかみ たす もら
「狼になんて助けて貰いたくないぞ。

く
喰われたらおしまいだ！」

おおかみ
すかさず狼が、

おれ あお いのち すく もら おん
「俺は、蒼に命を救って貰った恩があるだけで、

まえ い
お前たちなんてどうでもいいんだ」と言いました。



するとボス^{ざる}猿が

「わかった。^{ちから}力を^か貸してくれ」

^{おおかみ たの}と狼に頼みました。

^{おおかみ い}狼は言います。

「さあ！^{みな}皆で^{ちから}力を^あ合わせて、^{たす}助けるぞ！」

^{こんど}今度は^{さんぽん}三本の^{つた}蔦を^{つか}使います。

^{おおかみ}狼の^{からだ}身体にも^{つた}蔦を^ま巻き^つ付け、

そしてボス^{ざる}猿の^{おお}大きな^か掛け^{ごえ}声で^{たいぼく}大木を^ひ引っ^ば張ります。

「ソーレ、ソーレ」

「ソーレ、ソーレ」

^{たいぼく}大木が^{うご}ゴロンと^{はじ}動き始め^{ざる}ボス猿^いが言います。

「もう^{すこ}少しだ！^{みな}皆も^{がんば}頑張ってくれ。」

「ソーレ、ソーレ」

「ソーレ、ソーレ」

^{たいぼく}ついに大木を

^{うご}動かすことに

^{せいこう}成功しました。

^{こざる}子猿も^{ぶじ}無事です。

^{みな}皆^{おおよろこ}は大喜び！

^{ざる}ボス猿は^{れい}お礼にと^{おい}美味しい^{しょくじ}食事^{ようい}を用意してくれました。

^{おおかみ}狼と^{ざる}ボス猿が^{なかよ}仲良く^{すがた}している^み姿を見て

^{あお}蒼は^{しあわ}幸せ^{かん}を感じました。



ある夜、蒼は夢を見ました。

よく長老たちから話を聞いていた僕が産まれた激しい

嵐の日の夢です。嵐が去ると山々は荒れ、住んでいた

動植物が半分になった様子を夢で見たのです。

蒼はハッと目を覚まし、すぐに山頂へと走り出しました。

そして、五感を研ぎ澄まし、三日後に僕が産まれた時の

ような激しい嵐が来ると感じました。

急いで長老たちに伝えます。

「僕が産まれた時のような激しい嵐が

三日後にやってきます。

どうしたら皆を守れるか教えて下さい」

長老たちはびっくりした様子で話し合いを始めました。

翌朝、長老たちが蒼に言いました。

「お前は産まれた時の酷い嵐を

五感で憶えているのかもしれない」

「^{やま}山のふもとに^{おお}大きな^{どうくつ}洞窟があるわよ。

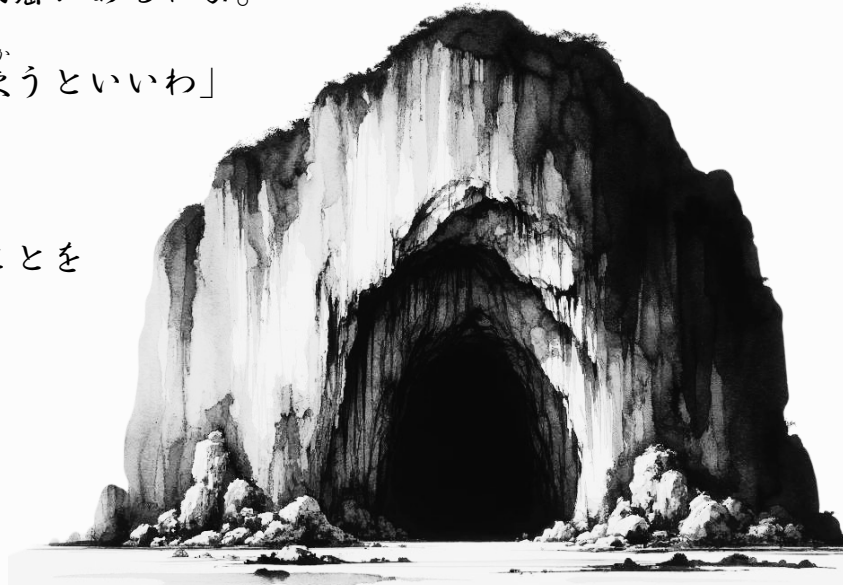
そこを^{ひなん}避難^{ばしょ}場所として^{つか}使うといいわ」

「^{あらし}あの嵐が^く来るということを

^{やまやま}山々に^す住む^{みな}皆に

^{つた}伝えても^{しん}信じて

^{もら}貰えるじゃろうか」



「^{あお}蒼はわしらの「^{いつ}五つの^き氣」という^{おし}教えを^{まも}しっかり守り、

この^{やまやま}山々やそこに^す住む^{どうしょくぶつ}動植物に^つたくさん^つ尽くしてきたからの。

きっと^{あお}蒼の^い言うことには^{みみ}耳を^{かたむ}傾けると^{おも}思うのじゃが」

「^{あお}蒼や！^{まえ}お前は^{むかし}昔みたいに

わしらだけが^{かぞく}家族じゃないからの。

この^{やまやま}山々に^す住む^{すべ}全ての^{どうしょくぶつ}動植物が^{かぞく}家族じゃ。

だから^{みな}皆を^{きき}危機から^{すく}救うんじゃよ」



あお ひとみ けつい かん
蒼の瞳には決意が感じられました。

ちやうろう ちえ もら
そして長老たちに知恵を貰い、

さっそく やまやま か ぬ さけ
早速、山々を駆け抜け叫びます。

す あらし く
「もう直ぐ嵐がやって来る！

やま どうくつ はや いなん
だから山のふもとの洞窟に早く避難をしてください」

しかし、山々の動植物は蒼のことを信用していたものの、

突然のことで動かない動植物ばかりでした。

それでも蒼は動物たちに訴え続けます。

そうしていると蒼のもとに五つの長老たち、

蒼が人里から帰って来てからお世話になった動植物たち、

以前に出逢った親子狐の一族、河童の一族、

ボス猿の群れ、たくさんの仲間たちが集まってくれました。

仲間たちは言います。

「三日後に嵐が来るんだな。」

急いで山々に住む動植物に知らせるぞ」



蒼^{あお}は皆^{みな}に指示^{しじ}を出^だしていきます。

「狐^{きつね}さんたちとお猿^{さる}さんたちは、山^{やま}々の食^たべ物^{もの}に詳^{くわ}しいから、

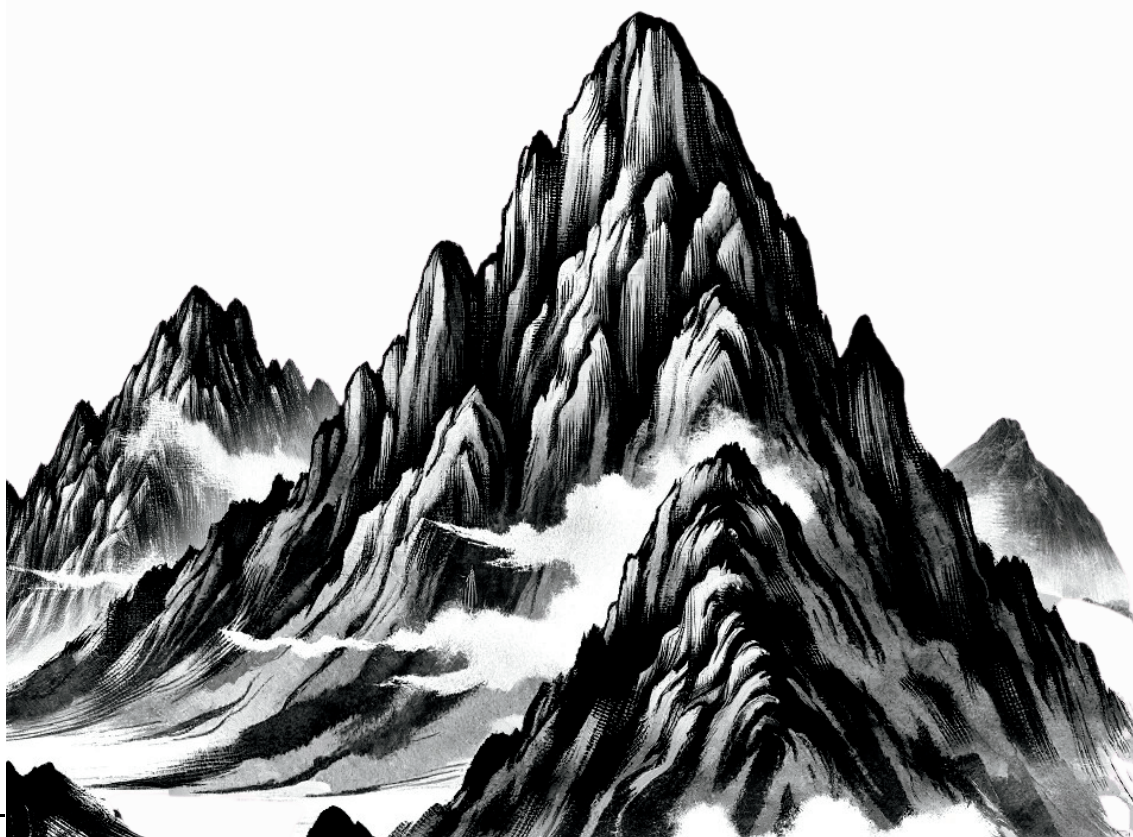
皆^{みな}の一週^{いっしゅうかんぶん}間^{しゅうりょう}分の食料^{あつ}をたくさん集^{あつ}めてください！」

「河童^{かつば}さんたちは、水^{みず}辺^べの動植物^{どうしよくぶつ}にこの危^き機^{つた}を伝^{つた}えてください！」

「長老^{ちやうろうさま}様^{さま}たちは、皆^{みな}に避難^{ひなん}するよう伝^{つた}えてください！」

蒼^{あお}は、身^{からだ}体の不自由^{ふじゆう}な動物^{どうぶつ}たち^{ところ}の所^いへ行き

避難^{ひなん}をさせていきます。



ふつかめ そうちよう ひなん ばしょ どうくつ い
二日目早朝、避難場所の洞窟に行くと、

やまやま す どうしよくぶつ みな どうくつ ひなん
山々に住む動植物が皆洞窟に避難していました。

あお おも
蒼は思いました。

みな ひなん つた
「皆が避難することを伝えてくれたから、

ほか みな ひなん はじ
他の皆も避難を始めてくれたんだな」

そして、おやこぎつね ざる こえ か
そして、親子狐とボス猿に声を掛けられ

ふ かえ しょくりよう やま でき
振り返るとたくさんの食料の山が出来ていました。

「もう一日で、もっとたくさん集められるから安心しろよ！」

とボス猿と狐が言います。

あお あんしん
蒼は安心しました。

しかし、洞窟内では罵倒が飛び交っていました。

一週間近く肉食動物と草食動物が共に

生活をすることになるので、肉食動物が

草食動物を襲うのではないかと揉めていたのです。

蒼も予想をしていない事態に戸惑います。

そんな姿を見て長老たちも

「十分な食料も確保できているから大丈夫じゃあ」

「同じ山々に住む動植物として

今は団結することが先決じゃ」と、宥めていました。

そんな論争は終わる様子もなく、

続いているので蒼は高台に立ち、伝えます。

「皆！今はそんなことを争っている場合じゃないだろ！
みな いま あらそ ばあい

それに肉食動物は10日間位なら何も食べなくても
にくしよくどうぶつ とおかかん くらい なに た
生きていけるんだ！」

おおかみ い
狼も言います。

「嵐が無事に収まるまでは、
あらし ぶじ おき

動物を襲うことは絶対しない。約束をする」と
どうぶつ おそ ぜったい やくそく

草食動物はザワザワしていましたが、
そうしよくどうぶつ

納得したようで各々の陣取った避難場所に戻って行きました。
なっとく おのおの じんど ひなん ばしょ もど い

蒼は狼に駆け寄り、お礼を言うと
あお おおかみ か よ れい い

「こんな時こそ助け合おう！っていうのを
とき たす あ

俺はお前から教えて貰った。だからお前の事を信じるし、
おれ まえ おし もら まえ こと しん

当然のことをしたまでさ」と
どうぜん

蒼の頬を舐めました。
あお ほほ な

蒼はこの狼の気高さを
あお おおかみ けだか

感じました。
かん



いよいよ三日目の朝を迎えます。

山々の動植物の避難も終わり、一週間以上の食料が

山盛りに置かれています。

山々の動植物の争いもなく穏やかな雰囲気が流れていました。

その様子を見て安心し、

蒼は洞窟の外へと向かいます。



どうくつ そと ようす すで ひ のほ じかん かか
洞窟の外の様子は、既に日が昇っている時間にも関わらず、

たいよう ひかり き こ そら いちめん ぐろ くも
太陽の光が差し込むこともなく、空一面ドス黒い雲が

うごめ とお かみなり おと き
蠢いています。遠くからは雷の音が聞こえ、

いなずま あお て
稲光が蒼を照らします。

ちやうろう あお そば い
長老たちも蒼の側にやってきて言います。

「やはりお前の勘は当たりそうじゃの。」

ちやうど まえ う とし あらし く まえ
丁度お前が産まれた時の嵐が来る前もこんなじゃったよ」

ほか どうしょくぶつ どうくつ い ぐろ
他の動植物も洞窟の入り口から

そら あた みわた おお あらし く けはい かん
空や辺りを見渡し大きな嵐が来る気配を感じたようで、

ふあん
不安そうにしていました。



蒼^{あお}は洞窟^{どうくつ}を見渡^{みわた}せる高台^{たかだい}に再度^{さいど}駆け上^かがります。

そして、

「皆^{みな}！もう直ぐ嵐^すがやってくる。

でも安心^{あんしん}してくれ。たくさんの食料^{しょくりょう}もあるし、

たくさんの知恵^{ちえ}をもった長老^{ちやうろう}たちもいる。

だから皆^{みな}で協力^{きやうりよく}すればどんな困難^{こんなん}でも乗り切^のれるからね」

そして続^{つづ}けて蒼^{あお}は言^いいます。

「僕^{ぼく}のことを信^{しん}じて避難^{ひなん}してくれて、本当^{ほんとう}にありがとう。

僕は皆^{みな}のことをずっと家族^{かぞく}だと思っているからね」と

言^いって蒼^{あお}は洞窟^{どうくつ}の入り口^{いぐち}までゆっくりと歩^{ある}きだします。

やまやま どうしよくぶつ あお なに み
山々の動植物は蒼が何をしにいくのか見ていました。

どうくつ い ぐら つ すて きょうふう ふ
洞窟の入り口に着くと既に強風が吹き、

おおつぶ あめ どうくつ ふ こ き
大粒の雨が洞窟に吹き込んで来ています。

そしてゆっくりと後ろを振り返り皆に伝えます。

「この洞窟の入り口を塞がないと皆が安全に

ひなん せいかつ おく どうくつ いりぐら ふた いわ
避難生活を送れない。それに洞窟の入り口に蓋をする岩を

うご でき ぼく
動かすことが出来るのは僕だけ。

あらし す
嵐が過ぎさったら

この岩をどけるからね。

これは僕を育てて

くれた長老たちや、

みな おんがえ
皆への恩返しだよ」

い どうくつ そと て
と言って洞窟の外に出て

いわ いどう
岩を移動させていきます。



その時、長老たちや山々に住む動植物は初めて気づきました。

蒼だけ嵐の中、外で過ごすことを。

「蒼～！」

皆は理解し、呻くような声、泣き叫ぶ声、悲しそうな声で

呼ぶと蒼はもうすぐ岩で塞がる入り口の隙間から

満面の笑みで皆の方を見ました。

その瞬間、「ドスン」と大きな音と共に

洞窟の入り口が塞がれました。



あお あらし く よかん とき なん おも
蒼は嵐が来る予感がした時に何となく思っていました。

あらし さいご ひ う こんかい あらし とき じしん いのち
嵐の最後の日に生まれ、今回の嵐の時に自身の命が

尽きてしまうのではと。

しかし、あお おも
蒼はそれでもいいと思っていました。

ちやうろう い き たび て つら おも
長老たちの言うことを聞かずに旅に出て辛い思いを

しながらも まな ちやうろう さず
しながらも学び、そして長老たちから授けていただいた

いつ き まっと じょじょ あお しんよう しんらい よ
『五つの気』を全うし、徐々に蒼への信用と信頼が寄せられ、

いま やまやま す すべ どうしよくぶつ かぞく
今では山々に住む全ての動植物と家族になれたのですから。

あお すご しあわ
蒼は凄く幸せでした。





どうくつ なか そと ようす わ
洞窟の中からは外の様子が分かりません。

どうくつない かみなり はげ おと
ただ、洞窟内にも雷の激しい音、

かせ ふ あ おと あめ ふ そそ おと
風が吹き荒れる音、雨が降り注ぐ音、

きぎ たお おと かわ ほんらん おと き
樹々が倒れる音、川が氾濫した音が聴こえてきます。

ちょうど いっしゅうかんご あさ
丁度一週間後の朝に

よわよわ いわ ひ おと き
弱々しく岩を引きずる音が聴こえてきました。

「ズル……、ズル……、ズル……」

ようやく^{いわ とびら ひら}岩の扉が開き、^{やまやま どうしよくぶつ}山々の動植物も^{かんき あ}歡喜を挙げて

入り口^{い ぐち お}に向かいます。しかし、^{やまやま じょうきょう ひど あ}山々の状況も酷く荒れて

いたことよりも^{あお すがた み}蒼の姿を見て、^{みな あお}皆は青ざめてしまいました。

からだじゅう^{けが}身体中が怪我だらけであの絹^{きぬ}のような

滑らかな^{なめ}白い毛は^{しろ け}茶色く汚れ、^{ちやいろ よご}所々皮膚^{ところどころ ひふ}が出ており、

身体も^{からだ}痩せ細り^や今にも^{ほそ いま}息を引き取り^{いき ひ と}そうな状況^{じょうきょう}でした。

蒼^{あお}は小さな声^{こえ}で「皆、無事^{みな ぶじ}だったかい？」と声^{こえ}を掛け^かます。

皆^{みな}はそれに呼応^{こおう}するように

「蒼^{あお}のお陰^{かげ}で無事^{ぶじ}だよ！」と聴いた瞬間^{き しゅんかん}、

蒼^{あお}は使命^{しめい}を全う^{まっと}したことに安堵^{あんど}の表情^{ひょうじょう}を浮かべ、

ゆっくりと蒼色^{あおいろ}の瞳^{ひとみ}を閉じ^と息^{いき}を引き取り^{ひ と}ました。



ちやうろう　あお　まわ　かこ
長老たちが蒼の周りを囲み、

まわ　やまやま　どうしよくぶつ　かこ　あお　とむら
その周りに山々の動植物たちが囲み蒼を吊います。

きき　の　こ　すべ　あお
この危機を乗り越えられたのは、全て蒼のおかげです。

かんしゃ　きき　とも　かな　きき　く
感謝の気持ちと共に悲しみの気持ちに暮れ、

みな　なみだ　なが
皆、涙を流しました。



ちょうろう ^な 長老たちが泣きながら言います。

「どうか蒼^{あお}が産^うまれたお稲荷^{いなり}さんを祀^{まつ}った古いお社^{ふる やしろ}まで

運^{はこ}んでくれないじゃろうか。」とお願^{ねが}いをします。

そうすると荒^あれた山々^{やまやま}で

歩^{ある}きにくい中^{なか}、

山々^{やまやま}の動植物^{どうしょくぶつぜんいん}全員が

協力^{きょうりよく}して蒼^{あお}を運^{はこ}びます。



お社^{やしろ}に着^つき、蒼^{あお}をその前^{まえ}にゆっくりと寝^ねかせます。

しばらくすると天界^{てんかい}の方^{ほう}向^{こう}から蒼^{あお}そっくりの

絹^{きぬ}のよう^{なめ}に滑^{しろ}らかで白^{しろ}色^{いろ}の毛^けをし、

瞳^{ひとみ}が海^{うみ}のよう^{あお}に蒼^{あお}い狐^{きつね}が二匹^{にひき}下^おりてきます。

そして、お社^{やしろ}の前^{まえ}の蒼^{あお}の身^{からだ}体^きは消^きえ、

眩^{まばゆ}い光^{ひかり}で彩^{いろど}られた身^{からだ}体^きとなり、

二匹^{にひき}の狐^{きつね}と共^{とも}に天界^{てんかい}へと駆^かけ上^あがって行^いったのでした。





あお たす こざる
蒼が助けた子猿が、

「あれは蒼のお父さんとお母さんだね！ 逢えて良かったね。」

い みな すこ ひょうじょう ゆる
そう言うと皆も少し表情が緩みました。

ご あお こうせき たた やしろ よこ
その後、蒼の功績を称えてお社の横に

せきぞう つく
石像を作りあげました。

てんかい め あと あお いしぶみ
天界に召された後も蒼の碑のもとには、

どうしよくぶつ おとず そな お
たくさんの動植物が訪れ、お供えものが置かれるようになりました。

あお まつ
蒼が祀られるようになってからは、

いど あらし にどと こ
あの酷い嵐は二度と来なかったようです。



企業理念



我々は、五つの『気』（樹 につき）を大切にし、介護支援を行います。

気配り

我々は、感謝の気持ちを常に持ち
「気配り」ある介護支援を行います。

気遣い

我々は、笑顔で心のこもった「気遣い」
ある介護支援を行います。

気働き

我々は、「気働き」溢れる介護支援を行います。

一団和気

我々は、思いやりの精神を大切にし
「一団和気」の環境を育みます。

意気

我々は、「意気」に富んだ人財を育成致します。



株式会社樹

代表取締役 樋尾重樹

出版：株式会社フォルム

